

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：22604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590176

研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム障害にたいする感情教育セミナーの研究

研究課題名(英文) Study on approaches for feeling education to the adolescents and adults with Autism Spectrum Disorders

研究代表者

須田 治 (Suda, Osamu)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：50132098

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：知的に高いレベルにある自閉症スペクトラム障害の青年・成人にたいして、この研究では彼らの自分の「感情の読みとり」における機能的な弱さを調整するための方法を探ろうとしてきた。わたしは最初はグループベースのその接近法を求めたが、できなかった。しかしけっきょく、ケースごとに、「発達ガイダンス」と「カウンセリング」のセッションを行なって、感情的な機能の弱さを支えることにした。この研究は、自閉症スペクトラム障害の感情の機能不全にたいする接近法への改善を探るといふ意味あいが含まれている。

研究成果の概要(英文)：In this study, I tried to find an appropriate approach to regulate the function of "reading own feelings" in the adolescents and adults with high-functioning Autism Spectrum Disorders. I firstly tried to apply group-based consultation with those people unsuccessfully. Then, I finally conducted case-based approaches to support their weakness concerning their self derstanding of feelings, by applying the sessions of "Developmental guidance" and "Counselling". This research will have implications for reforming the approach to the dysfunction of feelings in Autism Spectrum Disorders.

研究分野：臨床発達心理学

キーワード：発達障害 自閉症スペクトラム障害 感情の機能障害 発話内容分析 アレキシサイミア アスペルガー症候群

## 1. 研究開始当初の背景

アスペルガー障害と言われていた人びとは、2013年5月に改編されたアメリカ精神医学会の精神障害の診断基準第5版(DSM5)においては、自閉性障害や特定不能の広汎性発達障害などとともに「自閉症スペクトラム障害(ASDと略)」と呼ばれる一連の自閉症系の連続体の一部に組み入れられてしまった。

その中核には(1)対人的インタラクションの機能上の問題と(2)興味や行動のこだわり、あるいは感覚的運動系の特異性といった点が挙げられ、その機序は未解明であるにしても、これまでとは異なる発達支援の方法が必要とされる時代に入ったといえる。つまり実際には知能の問題は見逃すことはできないにしても、ASDというものは、知能の高低とも異なる人間関係の質にかかわる視点が必要になってきたと言うこともできるだろう。とりわけケース間の症状の特徴が多様ではあっても、もう一步個人ごとの不適応感に因應するための援助の方法論が必要になってきている。

そうしたなかで最近では、生理身体的な情動ないし、心的な感情の機能上の問題が、ASDの社会情動的な発達を妨げているのではないかという説明モデルが登場し、注目されている。本研究は、まさしくその関心に沿って、つまり情動、感情の機能的不全の問題にかかわって、ASD当事者にたいしてどのような接近法が望ましいのかを検討し、彼らへの支援可能性を探ることにしたい。

## 2. 研究の目的

### (1) 支援方法の探索

本研究は、ASDの対人的な緊張を緩和し、苦手な対人的状態においても内閉的な状態を減らすための支援方法を創出することを目的としている。そのため情動・感情的な視点から指導を行なうという「教育的な方法」にあたるものを検討している。これは危機的な状態への介入というものではなく、比較的安定状態にある青年に穏健な多様な教育的な接近法で対応するやり方を探るようとする試みだといえる。

補足の説明をするなら、従来の研究動向が、ASDの認知的能力に基づく生産活動のなかでの処理性を追及した「作業過程の改善のためのモデル」であるとすると、それは「実行能力の障害モデル」ともいえ、それはそれで有用であるとしても、現実には認知的機能の援助だけではカバーできない問題には限界があるといえる。本研究の目的は、ASDの人びとの社会的関係に参入することでの情動、感情的機能への調整の足場かけを行うことを目指すものである。

### (2) 感情発達についての探求

本研究はまた感情発達についての研究としての目的がある。ASDが示す行動問題について、多くの人びとがこれまで、それは作業

記憶の障害であって、情動、感情的な問題は、失敗に伴われる心的外傷体験であり、不安や緊張は二次的障害だと述べてきた。しかしいっぽうで情動の中核である扁桃体の機能不全であるという知見や、実行性の向上の支援がたくさんの強迫反応や行動問題を引き起こしている報告を見たときに、多角的な視点からの行動問題への検討が必要である。支援に方法的限界のあることに視点の変更が望まれるところを踏まえるべきだと考えられるのである。

## 3. 研究の方法

臨床的な知見としてはASDの当事者、この研究では青年、成人を対象とするが、それは現実的に支援方法を取り上げ、検討している研究が極めて少ないからである。しかもASDの人びとが示している症状が多様であり、それだけでなく、家族状況がさらに問題を複雑化させていることを、支援は現実的に解かなければならないといえるだろう。

### (1) グループ支援モデル

そこで最初の支援モデルは、そういう多様性をもっている個人を束ねて、グループで行動への支援が可能であるならば、当事者への経済負担を少なくしてすむし、かつ有効な心理学的援助効果を検討することができるはずだと考えた。

つまり当初は、グループ支援モデルで進められた。支援を5人以上のグループとしてアスペルガー症候群の青年、成人に声をかけたが、これを実現するための障壁のあることが解ってきた。それは従来から母親にチャンネルを作って個人支援はやってこられたのだが、グループ支援にまでそれが展開することの困難である。そもそも親子のあいだでコミュニケーションがあったとしても、円滑な調整がなされて青年がグループ支援に参加するにはASDには個人的、関係的な妨害因子が大きすぎる。当事者の側が参加を拒むことが多かった。そのことが改めて確認された。

### (2) 個人支援モデル

そこでケースを単位として可能性のある支援方法を探ることにした。

個人をベースにしたときに、発達支援としてすでに行ってきた行動支援と、カウンセリング的な成分とをどのように調和できるかを検討した。たとえばすでに行なってきた漸進的筋弛緩法に加えて、対話をベースとした感情への直面を促がす支援を試みたのであった。

さらにカウンセリングに入る前に、(1)当事者の内容分析を行い、それをもとにして、その個人の感情的な構造としての他者へのとらえ方の特徴を分析し、その査定結果から、当事者がなすべき感情的に感知すべきテーマをとらえたことにした。さらに(2)発達ガイダンスとしての助言を提供し、当事者の感情面での適応をサポートすることにした。

#### 4. 研究成果

##### (1) 全体像

支援実験では、11人の平均年齢28歳の青年・成人の高機能のASDの患者(男性9人、女性2人)である。診断名を踏まえて確認したところ、8名のアスペルガー障害/高機能自閉症であり、2名の特定不能の広汎性発達障害、1名の自閉症ととらえられた。(診断名と変更のあったのはアスペルガー症候群の2名である。)

既存の診断名を越える問題のあることを指摘するならば、障害としての症状そのものだけでなく、周囲が開かれた環境を用意しようとするかどうかと相互作用的にかかわっていて、単純な診断名だけでその個体能力の特性は把握できないことがあるということである。

各個人にたいしてカウンセリング、DSM5に沿った質問による障害確認、自閉症スペクトラム指標の確認、アレキシサイミア尺度得点の確認、感覚過敏の確認、さらには発話内容分析をもちいた感情表現インタビュー、漸進的筋弛緩法の実施を行っている。

このうち9名の平均はすでに算出されており、自閉症スペクトラム指数31点(カットオフポイント33点)、アレキシサイミア指数57点(グレーゾーン得点51-61点)ほかが出ている。ほとんどのケースに感覚過敏が深刻であり、就労状況は、障害者枠1人、通常職2人、作業所や就労支援中やアルバイト・無職が計8人であった。

##### (2) 内容分析の結果

このうち内容分析の結果を、西田・須田(2015)の発表のなかから報告すると、2ケースは、他のケースと同様に自分の負の感情に言及したり、正の感情に言及したりしているが、この2ケースは他者の気持ちに言及していたり、両義的な感情で他者をとらえたりしている。それが他のASDと異なっていて、つまり他者の感情の読み取りにおいて比較的感情機能を働かせていることが推測できるといえよう。

この2ケースについて、集約的な支援を行い、それを「感情感知機能の確認と感情にかかわる直面インタビュープロジェクト」と呼び、行った。

##### (3) 感覚感知プロジェクトの実施

さてこの実験的支援のなかで行なわれた「感覚感知プロジェクト」では、感情にかかわる相談を1ケースは5回、もう1ケースは6回に渡って行った。

感覚感知プロジェクトでは、感情の気づきと意味づけの過程にたいする一定のプログラムによってなされるが、それに当事者の自由な体験化を載せていき、助言によって体験化に採用自由な援助を提供するという試みである。カウンセリングにとっても近いため直ちに効果測定を行うことに意味があるとは考えられないが、支援への参加という態度変

化に幾分かの機能性の足跡がしめされている。

本研究では、内容分析とは別にオープンな非定型的な簡易カウンセリングをおこなったが、そのことによる実験への参加態度の変容は、全員に起こっている。そうしたオープン・コミュニケーションの成立の上に、「感覚感知プロジェクト」はなされていく。

目的は、弱体化された感情機能に気づきの機会を提供し、しかもその受け取り方の多様性を提供するということである。

実際行ったところ、弱体化にはどのような現象学的な構造があるのかが把握できるようになった。

それは、感情の機能の弱体化が、さまざまな認知的な機能をもちいた代行機能によってカバーされているということが示唆された。その詳細は、須田(2015)に一部だが紹介されている。

ケースSunとケースTonとは、それぞれ3回「感覚感知プロジェクト」によるプログラムを受けている。前者がアスペルガー障害、後者が特定不能の広汎性発達障害である。

簡単に述べるならば、ケースSunは自己感情への気づきが日常では弱く、さまざまな実行過程への認知的注意がとても強い。いっばうケースTonは、仮面によるバッファリングがなされ、その下に本音の感情が抑え込まれているように、それぞれ発話内容からとらえられた。もちろん別の方法でその機序は、確かめられる必要はあるが、しかし比較的容易にその特徴は表出されたものといえる。

そして3回のカウンセリングの過程では、感情の体験要素に触れることを、回避することなく感じとりそうした自己に対して独立した主体として自らを外的な環境から離れてとらえるようになっていく。そのことがそれまで欠けていたところと推測される。

この集約的ケースをまとめてとらえるならば、つぎのとおりになる。

こうした試みは、(1)主体の現象学的世界についての理解を障害をも含んだ内容として提供できたと考えられる。つまり標準化された心理尺度ではとらえられない、個人固有の適応の姿を提供できるといえよう。さらに、(2)支援の効果については、社会的に誰にでもわかるものとしての効果の測定は、発話内容でとらえられている部分もあるが、もっと社会的に妥当な方法での記述を検討する必要もあるだろうと考えている。しかし現時点でもカウンセリングのように、個人史的な変化をとらえることはなされている。たとえば就労において適応の手掛かりになる発想を得たとかか、あるいはほぼ衝突しかねない「与えられた就労状況」を避けて、ある程度自分を取り戻し、別の代替的な選択を見出したとかである。いずれにしても支援の効果をとらえることの検討を続けることにしたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

須田 治, 心身的な情動問題とは何か—自閉症スペクトラム障害への自然主義的アプローチ, 首都大学東京人文学報, 査読無し 500号, 2015, 1-28

岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香・高橋千枝・八木下(川田)暁子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・須田 治, 親はどのように乳児とコミュニケーションにおける代弁的機能, 発達心理学研究, 査読有, 25巻,1号,2014,23-37.

須田 治, 「この世的に生きる」ためのアスペルガー症候群支援, 首都大学東京人文学報, 査読無し, 485号, 2014, 1-20.

[学会発表](計 1件)

西田麻野・須田 治, 自閉症スペクトラム障害の感情の発話内容分析, 日本発達心理学会第26回大会, 2015年3月20日~22日, (於東京大学, 東京都文京区).

[図書](計1件)

須田 治, 感情への自然主義的アプローチ---自閉症スペクトラムへの発達支援, 2015 (印刷中) 金子書房.

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

須田 治 (SUDA, Osamu)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号: 50132098